



No. 79 2006. 1
 (株)よかネット

NETWORK

45年前から、地域の人を繋いできた集落内放送
 —鹿児島県南大隅町丸蜂地区— 2

「国にたよらず、家族だけにたよらず、金にたよらず」新しい人間共同体をつくろう
 NPO法人ニュースタートの「雑居福祉村」の取り組み報告 3

中心市街地活性化シンポジウム2005
 —交流人口を増やす— 5

高齢者はどこを終の住処とするのだろうか6
 高齢者の自市町内移動について直方市のケースで考える 6

福岡にアジアビジネスの交流拠点を
 中国企業の海外進出—走出去戦略—をにらんだ福岡市のアジア戦略 8

表紙説明 都心部の土地利用転換状況をみてみた 9

見・聞・食

柳川でベロタクシーをこいでみた 10

老舗料亭「老松」で考えた「博多の芸妓文化のこと」 11

近 況

佐賀、第2の知的生産時代『近代を開いた江戸のモノづくり』
 というシンポジウムで、インターネット博物館の話をしてきた 12

大相撲九州場所のことで叱られた話 13

いざという時のために 14

鹿児島での地域づくりに参加 15

糸島サロンはじめました 15

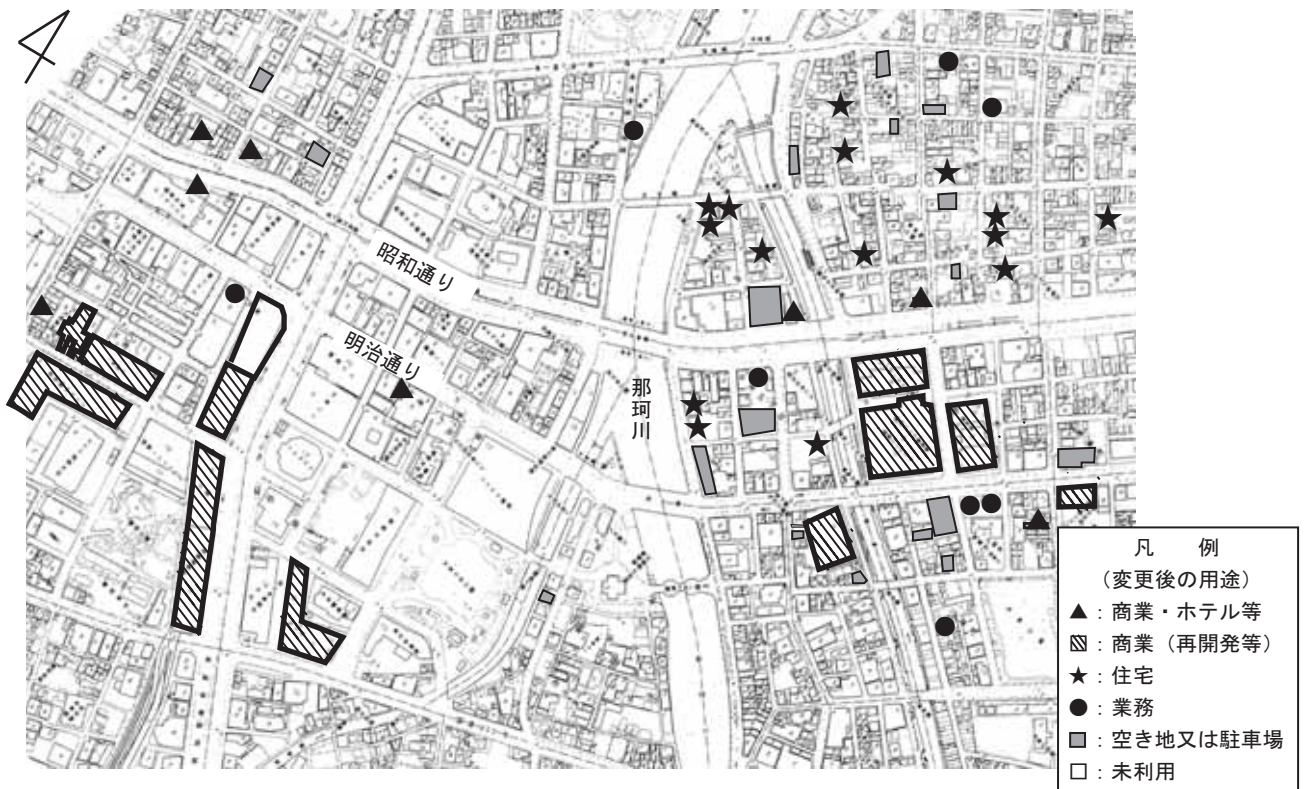
大学時代の恩師の7回忌に想う 15

電車と自転車でぶらりと観光したい 16

1年の計は元旦にあり 16

●10年間で都心の土地利用が住宅に移り変わっている？

福岡市都心の土地利用を2005年と1995年で比較しました。10年間で福岡市天神の中心は次第に南の方へ移動し、天神周辺では住宅へと用途が変わってきているようです。（詳細は本文p9へ）



45年前から、地域の人を繋いできた集落内放送

鹿児島県南大隅町丸峰地区

雪丸 久徳

11月末日～12月1日にかけて、久々に故郷に帰る機会があり、実家に一泊してきた。

実家は、鹿児島県の大隅半島の南端、南大隅町（旧根占町）の“丸峰”という農村集落にある。現在約世帯数76戸、約200人、75歳以上が約60人の集落である。

毎朝毎晩丸峰集落に響くアナウンス

12月1日am6:25

『みなさんおはようございます。6時25分になりました。ラジオ体操で、日中のお仕事、仕事に備えて体をほぐしていきましょう！』

早朝、懐かしい声が家中に響き渡った。私が幼い頃から一年365日、毎日聞いて育った、集落内のアナウンスである。丸峰出身の人なら誰でも知っている“ひろじおじさん”の声だ。正直、今でも続いていることに驚いた。

が、もっと驚いたのは、そのおじさんのアナウンスは、私の母が子どもの頃、既にあったということ。悠に40年以上は続いていることになる。後で確認したところ、現在65歳、放送は20歳の頃から始めたとのことだ。

am6:45

『親と子と対話でつくろう、明るい家庭（このいまわしは単なる鹿児島弁ではなく、独特のアクセントがある）。おはようございます。小学生の朝読みの時間です。今日は2年生と4年生です。』

これはまた、私にとって懐かしい小学生の朝読みの時間で、アナウンスに続いて小学生が名前と題名を大声で言った後に本文を読み始める。これらは、集落内全76戸の家に設置されたスピーカーから流れるようになっている。その日は風邪で声が枯れている子が読んでいた。とっさに母が「はら、君は風邪をひいたもんじゃ～！きゃははっ！」と言っていた。朝読みのおかげで、我が子が成人しても、集落内の子どものことについては、名前、学年、誰の子といったことはもちろ

ん、部活は何をしているだとか、足がめっちゃ速くて学校の代表選手に選ばれただとか、大体のことはわかるそうだ。私も小学生の頃は、当たり前のように朝読みに通った。当時は朗読の後、歌を唄うのがやりだった。集落内の人と話すると今でも「久徳君は元気してるのぉ？嫁さんはまだねえ？」といった会話が普通にあるそうだ。

am7:00

『あなたもできます。わたしもできます。小さな親切、笑顔であいさつ。（ここもなぜか必ず独特のアクセントです）おはようございます。今日は十二月一日木曜日、旧暦は十月三十日、ひのえひつじの日、先負です』といったおきまりのアナウンスに続き、集落内行事や町内の行事などのお知らせが4、5分程続き、最後にその日の天候などに合わせた気の利いたコラムと『戸締まりと火の用心！』という台詞で締めくくる。

約30の地域行事が今でも続いている

集落内には、年齢に応じて8つくらいの会（子ども会育成会、青年団、長寿会、若妻会、婦人会、やろう会、むつみ会...）があり、集落の行事は1月の年始会、七草祝に始まり、鬼火焚き、山神祭り、岬祭り、各種スポーツ大会、敬老運動会（焼酎が35升くらい空く）等、ざっと数えても30はある。ほとんどの行事が私が子どもの頃もあって今でも続いている。残念だったのは、9月の十五夜で綱引きと相撲が行われるが、毎年手編みで作っていた綱が今では既成のものを使っていることと、小中学生が中心になって踊る“鎌おどり”という伝統芸能が無くなったことだ。子どもが少なくなると続けることが難しくなり、ついにやらなくなったそうだ。それらを除いては、ほとんど今でも続いている。また、集落全体の行事以外にも、氏神祭り（ウッガンサア）、田の神祭り（タノカンサア）といった祭りがあり、受け持ちの順番が回ってきた家は料理や酒を振るまう。そんなことが今でも当然のように行われているから、この集落



本土最南端の南大隅町の小さな集落「丸峰」の絆は、相当なものである。集落内の人や名前が言えるくらい当たり前の濃いコミュニティになっている。

住んでいる人が減り、集落を維持できなくなっているところもあると聞かすが、丸峰集落では十分維持できていると感じた。人がまだ多く住んでいるというのはあるが、集落、地域の縁繋がりを持てているのには、何かポイントがあると思ひ、まとめてみた。

集落のまとまりは、そこに住んでいる大人がまずはしっかりと地域の行事・会合に参加することで生まれる。（仕事が忙しいからといって、いい大人が地域との係わりをもてないようでは、村八分になるというのもあるかもしれないが、実は本人たちは数々ある行事をおもしろおかしく楽しんでいる）

集落の行事等を持続させてきた仕組みとして、45年の続いている集落内放送がある。（それを続けてきたキーマン「ひろじおじさん」の存在は大きい。目が見えにくくなって瓶底のような眼鏡をかけるようになって、杖をついてでも、365日毎日朝晩欠かさずアナウンスをする）

毎朝きまって朝読みがあり、おかげで集落のみんなが、集落内の子どものことを知っているし、育てている、見守っているといった気分になる。（皆が毎日同じラジオ番組を聞いているといった感じで、共通の話のネタになる）

子どもの人口が減った時、集落内に8戸分の住宅をつくり、若いファミリー世帯を呼び込んでいる。（うち、脱サラして東京方面から引っ越してきた家族が3組。この人たちが、率

先して行事を盛り上げているほど、集落に馴染んでいる）

これは、極端な田舎の例ではあるけれど、切り口次第では、コミュニティづくりにうまく活かすことができる良い手本になるのではないかと思う。機会があれば、集落に昔から残る資料のことやカリスマアナウンサー、脱サラして住み着いたファミリーの方に取材して報告したい。

（ゆきまる ひさのり）

「国にたよらず、家族だけにたよらず、
金にたよらず、新しい人間共同体をつくらう
NPO法人ニュースタートの
「雑居福祉村」の取り組み報告
本田 正明

現代農業という雑誌に「若者はなぜ農山村に向かうのか」という増刊号(2005年8月)がある。その中で、「教育・福祉・農業が一体の「雑居福祉村」が始まる」という記事に目がとまった。サブタイトルには、「戦前世代・団塊、ジュニアが知恵、金、農地、仕事を持ち寄って・・・」とあり、魅力的な手書きの雑居福祉村イメージ図もある。

主体となっている「NPO法人ニュースタート」は、引きこもりの若者たちが共同生活を送る若衆宿や四国お遍路ツアー（60日間）などもやっていたりする。どんなところなのだろうと興味を引かれ、さっそく事務局に電話してみた。「取材は第2・4水曜日しか受け付けていないのですが、今度雑居福祉村の全国集会があるので、一度そちらに参加してもらおうと雰囲気は分かると思います」ということだったので、東京までその集会を覗きにいった。

「人とつながっていきっていくことが楽しかったので、そういう人を増やしたいです」

事務局は千葉にあるのだが、集会は東京の渋谷であった。会場に入ると「こんにちは一」とスタッフのさわやかな挨拶に迎えられる。20代が多くみんな生き生きとしている。ニートや引きこもりの相手をしているのはやっぱり同世代なんだな、楽しんでやっついそうだな、それに比べて自分はおっさん化しているな、など思いながら席に着いた。

受付でもらった資料などに目を通してると、

介護や福祉、教育といった言葉がよく出てくる。現代農業という本で知ったので、農業をメインにいろんな人がつながっているのかと勝手に思いこんでいたが、どうもニートの方が中心で、農業は仕事体験の1つという位置づけらしい。

「雑居福祉村」活動現場からの報告では、千葉、北海道、滋賀、山梨、鹿児島、愛媛からそれぞれの取り組みの発表があった。障害をもつ人と若者が一緒に生きていけるコミュニティを目指していたり、牧場づくりを目指していたり、ユースホテルもあったりと、主体によってやっていることがずいぶん違う。中には20ha程度の農園（野菜5ha、みかん15ha）で、若者の農作業研修や共同生活を行っているところもある。北海道の取り組みでは、リーダーになっている人が大学不登校だった引きこもり経験者で、ニュースタートの若衆宿で共同生活や四国のお遍路などを経験するうちに事務局のスタッフとなり、結婚相手まで見つけてしまっていた。「人とつながっていきっていくことが楽しくなったので、そういう人を増やしたいです」という言葉がとても印象に残った。

「(ニートと)ベビーブーム世代とは相性がよくないみたいですよ」という話

会場に行くまではどちらかという田園居住の参考にならないかという思いが強かったのだが、話を聞いているうちに、これは個族化社会の話だなと思うようになった。そうすると、どんな人が参加しているのかが気になってくる。改めて会場を見回してみると、20～30代の人と60代ぐらいの年配の人は目立つのに対し、40代～50代の人たちはあまりいない。そういう人たちは会社の中心世代なので、忙しくてこうした活動には参加できないのかもしれないが、気になったので「BB世代の人たちの参加が少ないように思うのですが、何か理由でもあるのでしょうか」という質問を試みた。

場違いな質問だったのか、会場がシーンとしてしまったのだが、代表の二神さんが、「BB世代とは相性がよくないみたいですよ」といって話をしてくれた。メモを取り損ねたのだが、ニュースタートの通信の中には「BB世代の人たちは指示ばかりして自分たちのしたいことだけしようとするので問題だ。若い人たちの意見をもっと聞いて一緒に汗をかくような人でないとダメだ」というこ

とを書いているスタッフもいた、という内容だったと思う。

よく考えてみると、ニートだとか引きこもりといわれる世代は、BB世代の子どもの世代（2BB世代）とだいたい同じだ。実際に自分が付き合っている人たちを思い浮かべても、同世代か年配の人が多く、BB世代は少ないように思った。

NPO法人ニュースタート事務局の取り組み

本来であれば、「なぜこんなことを始めたのか」「資金はどうしているのか」といった取材をしたかったのだが、集会后もスタッフの一人と名刺交換するぐらいの時間しかなかった。ただ、もらった資料には、取り組み内容が詳しく書いてあったので、そちらを抜粋させてもらう（下表）。

体験塾の事業メニューには、デイサービスでのお年寄り介助や保育園での園児の世話をしていたり、喫茶店やレストランの営業もしたり、IT事業部ではニュースタート通信の編集だけでなく外部

<NPO法人ニュースタート事務局の取り組み>

不登校・引きこもりそしてニートなど目標喪失の若者のサポートに取り組み、これまで700人を超える若者の再出発を支援してきました。地域や社会の問題としての視点に立って、他の力を借り、さまざまな側面から若者に働きかけてゆくの「引きこもり・ニート解決の3点セット」です。

訪問部隊：引きこもる若者を訪問し、サポートするスタッフとして「レンタルお兄さん・お姉さん」がいます。定期的に粘り強く訪問を続け、自力では外に出られない引きこもりの若者を、家から連れ出すことを活動の目的としています。個人差はありますが、会えるまでには半年、連れ出すまでには1年ぐらいを必要とします。現在20名ほどが活動中。同世代との交流を望む引きこもりの若者が多いので、部隊の構成メンバーも若者が中心となっています。

若衆宿：家から出るようになった引きこもりの若者が、共同生活を送るための寮のことです。千葉県市川市行徳を中心として現在10カ所あり、（そのうち4つは海外）にあります。若衆宿の主旨は、共同生活を通じて引きこもりの若者に不足しがちな他人との交流や生活体験を重ねることにあります。運営は若者たちの自主性にゆだねられており、入寮した若者は共同生活を送る上での協調性や日常生活を送る上で必要な仕事を身に付けていきます。

仕事体験塾：引きこもりの若者にとって不足している協働体験、社会体験を積むための場です。実社会の仕事を体験することで、「働く」という感覚を養いながら社会に参加できる力を身につける場です。（ニュースタート通信特別号より）

から調査・分析業務を受注したりもしている。中でもデイサービスは好評のようである。長期間引きこもっていた結果、言動がスローだったり、テキパキ働くのが苦手なタイプが多いニートの方が、かえってお年寄りに安心感を与えているみたいである。「雑居福祉村」もこの仕事体験塾の事業の一環になっている。

ニュースタートの取り組みをみていると、青年の個族化については、“ニート”や“引きこもり”といった形で社会的な認知も進み、サポートシステムもずいぶん充実してきているように思った。

B B世代や田舎暮らし希望者にも若衆宿のようなサポートシステムがいるのではないかな

B B世代である自分の親を見ていると、以下のように4つの点で、社会との縁・ネットワークが切れやすくなっていると思う。

田舎から都会に就職した人が多く、地域との縁が切れている（田舎に友人が残っていない）

親との死別等によって血縁も薄くなっている

会社の退職で、社縁もなくなる

特に趣味も持たず、そうした場を通じた仲間や知人もいない

母は親戚付き合いだけでなく、いくつかの友達グループを持っている（少年野球団のママさんネットが今だに生きていたりする）ので、あまり心配していないが、仕事一筋で生きてきた父は、友人などと一緒に飲んだといった話も聞かないし、趣味も持っていない。祖父母が亡くなってからは親戚が集まる機会もない（私自身も甥っ子などにお年玉をあげたという記憶がない）ので、4つの縁すべてが切れそうである。したがってこれからは、壮年（特にB B世代）の個族化、特に男性の問題なのかもしれない。

全国集会の中で、ニートの世代とB B世代の相性がよくないのでは、という話があったが、むしろ本質的な問題は、“B B世代が周りとの付き合いをせずに生きてこれたから”ではないだろうか。もし、本当にそうだとすると、B B世代が今後大量に退職するからといって、NPOや地域づくり活動などに積極的に出てくるとは考えにくい。逆にB B世代からは「地域との付き合いは本当に必要なのか？」と尋ねられそうだが、少なくとも公的なサポートが細部まで行き届かない郊外部や田

舎などでは、必要になると思う。

新聞のアンケート調査などでも、定年後は田舎暮らしをしたいという人もいるが、都会の考えをそのまま持ち込んで、集落から孤立している人の話も聞く。せっかく田舎暮らしを実現しても、集落に居場所がないのでは寂しすぎる。

新しい人間共同体をつくるためにも、田舎のしきたりや地域との付き合い方を学んだり、若い人たちと一緒に活動する場やサポートの仕組み、人と人を引き合わせるようなおせっかい係が必要なのではないか感じた。（ほんだ まさあき）

中心市街地活性化シンポジウム2005

- 交流人口を増やす -

山辺 眞一

全国の中心市街地活性化を支援しているNPO法人TOMネットの主催で「交流人口を増やすまちづくり」をテーマに中心市街地活性化シンポジウムが開催された。

この法人は、北海道から九州まで全国6カ所の支部を持ち、市町村、商店街、企業のまちづくり活性化の悩み相談会、まちづくりの研究会、勉強会などの活動を支援している団体である。

小生が参加したのは平成15年に九州会が設置された時であるが、団体自体は1999年に国の法人認証を受けており、北海道の市町村をはじめとして全国でまちづくりのお手伝いをしている。

まちづくり交付金を有効活用

当日のシンポジウムには、福岡地域の行政、企業、市民など約180名の参加があった。

基調講演は、国交省九州地方整備局の白田氏から、まちづくりに関する国の取り組みについて「まちづくり交付金」の仕組みと効用を中心に解説があった。地域の個性づくりのため様々な事業をより効果的にするために是非このまちづくり交付金を使って欲しいという話があった。ポイントは主体の目論みとやりたいことがあれば、いろんなメニューを一括して計画することができ、地元のアイデア次第である、ということである。

人口3千人でも再開発はできる

続いて、TOMネットの林代表理事の報告では、これまでTOMネットが取り組んできた事業を中心に紹介があった。最初に、交流人口を増やすた

めには、「地域の魅力は何か」について、茨城県龍ヶ崎市の「コロッケ」をきっかけにした商店街のにぎわいづくり事例の紹介があり、「食、おいしいもの」が一つの活性化のキーワードになると強調された。また、層雲峡温泉街の再開発や宮城県古川市の再開発事業や小樽駅前再開発ビルをもう一度再開発する取り組みなどのいくつかの事例紹介があった。時間が少なかったため詳しい内容は紹介されなかったが、聞いたところによると、古川の再開発をはじめとして、いま人口規模の小さい地方中小都市の中心市街地での再開発は、従来の再開発のように容積率一杯に保留床を取ろうとする手法は困難で、保留床の売却先が見つからない、また三階以上の建物に対する需要がない等の問題をどう解決するかがポイントとなっている。

そのため地方中小都市の中心市街地では、容積率を一杯使って、なかなか売却できない保留床を建設することよりも、地権者・関係者が転出せずに営業・居住を続けられぐらいの、低容積、低層でもできる再開発に対する支援制度、手法が必要とされているようだ。

福岡市でも何かしなくては人は集まらない

後半のリレートークは、福岡市のアジアマンス担当の山本さん、ビクターズインダストリー推進室の尾崎さんの二人から、福岡市の集客の仕掛けづくりの話が提供され、団体型ではなく、個人を集客する取り組みの紹介があった。当社でもこれまで何度か紹介している「福岡博多まちあそび」など、町の再発見を民間と協力しながら「おもてなし」を基本とした施策の展開が紹介された。

そして、民間の立場から福岡地所の濱田さんからは、キャナルシティをはじめとした街なかの集客施設の仕掛けの考え方について「気持ちよい持ち帰りたい また来たい」を体験してもらうこと、そういう施設・環境づくりと毎日のイベントでの仕掛けづくりに対する取り組みを紹介して頂いた。施設や装置は街のインフラで、イベントや食・お酒はおもてなし、これを合わせて提供することで交流人口を増やしていくことがポイントであると思った。

いずれにしても、福岡市のように人々が昼夜間集まるところでの街の仕掛けづくりや、小さな町、小さな都市での仕掛けづくりも、その土地に合った仕掛けをどれだけ出来るかが交流人口を増やす

ために必要である。林代表理事の再開発の話のように、地域の身の丈に合った再開発が必要ということも全く同じ意味を持っていると思う。

国の施策も地域の個性、アイデア、主体的な動きに対してサポートするというのが基本的な方針であり、口を開けて待っていれば、という時代はすでに遠い昔のことのように感じた。

(やまべ しんいち)

高齢者はどこを終の住処とするのだろうか⁶

高齢者の自市町内移動について 直方市のケースで考える

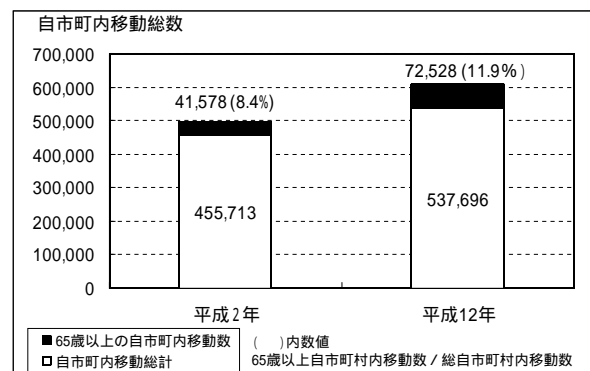
山田 龍雄

現在、福岡県住宅マスタープラン（正式には「福岡県新住宅総合計画」という）の調査、計画策定の手伝いをしている中で、地方都市の『街なか居住』ということが一つの重点テーマとなっている。そこで、筑豊地域の拠点都市のひとつである直方市をケースに街なか居住調査の一環として不動産事務所、マンションデベロッパー、商工会議所などの関係機関にヒアリングしていくと、どうも高齢者（65歳以上を対象）が自市町内で結構移動が活発になっているのではないかと推察された。

ここ2～3年の間にJR直方駅前に4棟（200戸程度）の分譲マンションが建設され、高齢者が結構入居しているようだ。（これは、たまたまマンションの入居している関係者から話を聞くことができたもので、残念ながら数値的な裏付けはない。）

直方市などの地方都市であっても郊外団地や集落に居住している高齢者世帯の中には、地域

図 福岡県の自市町村内移動の推移



出典：国勢調査

表 65歳以上高齢者の自市町内の移動の状況

	単位:人							
	自市町内 移動総数(a)	65歳以上 移動小計(b)	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80～84歳	85歳以上	比率(b/a)
福岡県	610,224	72,528	18,565	15,350	13,038	10,661	14,914	11.9%
直方市	6,270	955	206	190	168	163	228	15.2%
飯塚市	9,577	1,096	244	215	190	165	282	11.4%
田川市	6,668	1,141	255	204	207	194	281	17.1%
甘木市	3,505	518	72	96	83	98	169	14.8%
宗像市	7,176	633	157	130	111	92	143	8.8%
春日市	12,308	786	271	182	158	99	76	6.4%
太宰府市	5,025	525	116	85	101	84	139	10.4%
嘉穂町	515	140	15	10	14	36	65	27.2%
添田町	930	256	28	36	45	54	93	27.5%
浮羽町	1,040	192	25	34	25	26	82	18.5%

出典: 国勢調査

の行事などが煩わしく、マンションであれば付き合ひも集落ほど煩わしくないだろうと思って移ってきた人がいる。(実際に分譲マンションに住んでいる人の話)

昨年、駅近くに賃貸マンション(家賃6.7万円)の物件が供給されたときには結構高齢者の問い合わせがあった。(この物件は、あいにくオーナーが若い世帯を入居させることを優先したため、高齢者は入居できなかったらしい。)

介護保険制度の導入後、市内に入所系の福祉施設である保健施設、グループホーム、有料老人ホームが建ってきており、これらの施設へ入所しているのではないかと述べた。

逆に街なかでは空家が増えてきており、古くから居住していた高齢者が郊外や他市町など、どこかに移動しているのではないかと述べた。

直方市の自市町内の移動では6～7人に1人が高齢者

高齢者だけに絞って人口移動の概況をみるため、平成12年の国勢調査の移動調査(平成12年調査時点で5年前の居住地との比較)をもとにみている。

対象をおおまかに直方市、飯塚市など、炭坑などで栄えていた人口4～8万人の地方都市、宗像市、春日市などの福岡市近郊のベットタウン、

添田町、嘉穂町など山間部を抱えている1万人前後の町を対象に整理した。ちなみに福岡県全体の平成2年(平成2年調査時点で5年前の居住地との比較)から平成12年の間で高齢者の自市町村内の移動率の推移をみると、8.4%から11.9%と3.5ポイント伸びており、実数にしても約3万人増えている。(左ページ下図参照)

移動率だけみると特に山間部を抱えている町が高く、添田町では年間50人程度の高齢者が町内で

移動している。これは平成12年以降の介護保険に基づく施設入所や高齢者一人では生活が厳しい山間部から移動などが原因ではないかと推察されるが、この理由については再度役場や集落などにヒアリングしないと実態はつかめない。

一方、直方市では年間では約190人が市内で移動しているようだ。また、他県・他市町への移動は年間約104人と市内での移動に比べると約半分程度である。

直方市では前期高齢者も年間約80人程度市内で移動している

前に高齢者の移動は、介護保険制度をにらんで入所系の福祉施設が多く建てられてきたことが大きな理由のひとつになっているのではないかと述べた。そこで、直方市において、平成7年以降の程度入所系施設がオープンしたかを役場で確認すると、グループホーム5箇所(定員54名)、老人保健施設2箇所(定員115名)、ケアハウス1箇所(定員30名)、有料老人ホーム4箇所(定員約250程度)と、その総定員は概ね450人ぐらいとなっている。有料老人ホームは、昨年以降から3箇所一挙にオープンしたものであり、まだ満杯になっていないらしい。

これらの施設には市内居住者だけでなく、周辺市町や直方市に居住する子どもから呼び寄せられた遠方の高齢者も入所していると思われるが、市内移動が増えていることの理由のひとつは、この福祉施設の開設増が原因であろう。しかし、直方市では65～75歳の前期高齢者も年間約80人程度移動していることから考えると、地方都市においても、元気な高齢者は郊外から街なかへ、街なかから郊外へなど市内を移動していると思われる。今後、高齢者の増加とともに、これらの移動高齢者も増えていくものと想像される。

ちょうど10年前にNIRA（（財）総合開発機構）の委託研究で「高齢者はなぜふるさとを離れたのか」というテーマで高齢者の移動実態を調べたことがあった。この時には九州各県の高齢者が他県へ移動している量が多く、この実態と今後の対応について考えたものであった。このときに集落調査で記憶にあるのは、高齢者は夫婦のうち田舎で住み続けられるが、一人になると子どものもとに呼び寄せられることが多く、都会に呼び寄せられても馴染めないで戻ってくるというケースが多く聞かれたことであった。このように基礎的な調査を踏まえた上で、田舎で一人でも暮らしていけるような解決策として“様子見圏（車で日帰りできる時間距離で半日程度滞在して様子見ができる圏域）”というコンセプトを提案したものである。

高齢者居住のあり方を考えるには高齢者移動のモデル調査が必要

今回、高齢者の自市町内移動については、あくまで統計資料と地元ヒアリングから概観を眺めたにすぎない。今後、団塊の世代が65歳以上となる2012年以降に急激に高齢者が増加するとともに、自市町村内や他市町への転出移動が増えていくこと、また、今後の高齢者の居住のあり方を考えていくためには、モデル的にも高齢者の追跡調査を実施し、高齢者が「どこに、どの程度、どのような理由で移動しているのか」といった基礎的な調査が必要ではないかと思った。

また、今回、山間部を抱える町村での高齢者の町内移動の実態は分析できなかった。これは、機会をみて関係町村にヒアリングして少し原因らしきものが把握できた時点で、次回以降にご報告したいと思う。（やまだ たつお）

福岡にアジアビジネスの交流拠点を
中国企業の海外進出 - 走出去戦略 -
をにらんだ福岡市のアジア戦略
山辺 眞一

11月28日、北京市で「21世紀中華街構想シンポジウム」が開催された。主催は、「21世紀中華街構想日中合同検討委員会」である。

この構想は、福岡市がアジアの交流拠点都市づくりの戦略として中国との経済交流を強めるプロ

“21世紀中華街的前景与课题” 研讨会现场报道



当日の取材に来ていた中国のサイト（<http://house.sohu.com>）に掲載された写真

ジェクトとして進めているものであり、当社もお手伝いをさせて頂いてる。

この構想が狙いとするのは、中国の経済発展を担っている民営企業の海外投資・進出と中国政府がこれをサポートしようという海外進出戦略「走出去（日本語訳では歩いて出て行くという意味）」の動きを視野に入れ、福岡・九州への対日投資、経済交流、人的交流を拡大し、福岡がアジアビジネスの交流拠点になろうというものである。

日本で最初の中華街「大唐街」は博多に

ご存じのように、古代の日本に3カ所あったと言われている外国人の客館「鴻臚館」の一つである大宰府鴻臚館（平和台球場があったところで発掘中、展示見学ができる）があり、アジア大陸との交流が盛んに行われていた。その後中国宋との交流、日宋貿易で多くの博多商人が活躍した。これらの中国から多くの人々が渡航し居住した所が、博多に日本で最初に作られた中華街「大唐街」だったと言われている。

そして今、数百年を経て、中国と博多・福岡は往時の交流を再びとり戻す時機が来た。

グローバル化する世界経済の中で

今中国は、海外からの投資を梃子にした世界の工場となり、13億人規模の市場を持つ経済国になろうとしている。

海外投資の規模は、先進国に比べればまだ小さいものの、国内での外貨備蓄の増加、民営企業の成長を背景として、商品・労務の提供から、欧米企業の買収、海外投資によって、グローバル市場への進出を着々と進めている。

このような動きを読み、福岡市は、アジアビジネスの交流拠点としての都市機能を高め、東アジア

アへの日本のゲートウェイとしての地位を高め、中国を当面のターゲットとする「21世紀ビジネス中華街」構想を進めている。

中国、日本の同じ思い

シンポジウムでは、竹内実先生（京都大学名誉教授、委員会顧問）の基調講演の後、日中の委員会メンバーによる討論会が行われた。

相方の発言の中で、互いに共通、相通じていたことは、片方に利益があるということではなく、互いの利益になることが結果として重要であること、そして一つの地域（福岡市という意味）がグローバルな対応をすることが必要になった、政府ではなく地域の自治体が海外でアピールをする、それを海外が受け入れる、そういう時代になったということである。

これから福岡市のような地方都市の動きがきっかけとなり、アジアでの新しい協力体制は、国と国との関係だけではなく、新しい協力関係が活発化してくるであろうということであった。

基調講演で言われた竹内先生の言葉の中に、「かつては中国は日本の先生であった」ということに加えて、パネラーからは「日本が中国の先生になっているところもある。日本の良いやり方は中国も学ぶべきところは学ばなければならない」という中国企業家の発言も出るなど、一方的に認めさせようという発言ではなく、これからの日中の将来を真摯に期待する若い人たちの意見が強く印象に残った。

日中関係はきつとうまいく

最後に、「福岡ビジネス中華街構想」の柱である「人材」「経済」「文化」の3つのテーマに対して、「中・日の関係を不安視する人々も多いが、これまでの体験、歴史からみて、必ずこれは克服されることを確信している。」といわれた中国前駐日本国大使館領事の千先生の言葉で、このシンポジウムが終了した。

このシンポジウムに参加した人々は、中国民営企業の関係者を中心とする約80名だったが、全ての人々が同意するための発言ではなく、今の日本の地方都市が、何を考え、中国とどういう関係を築き、日中関係をこうしたい、ということを目指した初めての場であったと思う。

（やまべ しんいち）

表紙説明

都心部の土地利用転換状況をみてみた

7年前、98年のよかネット33号で「福岡の元気は1970年代に始まっていた」として、福岡市の天神1、2丁目の大型ビルの竣工年度を調べました。この時、70年代前半までに建設されたビルの5割程度が明治通り沿いに集中して建設されていることがわかりました。

今回は、95年と2005年の建物用途の転換をみました。天神地区では、1992年のバブル崩壊以降もアクロス（竣工：1995年）、西鉄福岡駅再開発～ソラリアステージと三越百貨店（1997～99年）、大丸百貨店拡張～大丸エルガーラ（1997年）、岩田屋のNTTやNHK跡地への移転（1996年と2004年）など、大型商業ビルの開発が相次ぎました。西鉄福岡駅の南側への移動と相まって、天神の中心は次第に南の方へ移っています。

一方、博多部では、明治通りや昭和通りといった大通りに面したところ以外では、ここ10年間で住宅へと土地利用が転換している物件が多いようです。東中洲地区の方では映画館や飲食ビルが、空き地・空ビルを経てワンルームマンションへ転換しています。当社北側にあった元全農連ビル（5階建て）は20階建ての賃貸マンションに生まれ変わろうとしています。平成18年6月にオープン予定です。このビルは当初分譲マンションとして販売予定だったものを、東京の投資会社が不動産投資信託を活用し、全て賃貸住宅とするため買い取ったそうです。また、昭和通りより北側の、卸問屋やまち工場など低容積利用だった須崎町、古門戸町といった地区がビジネスホテルや住宅（賃貸、分譲マンション両方）へと転換したり、空き地や駐車場も多くなっています。

福岡市では昭和60年頃から都心部の定住対策として、共同化促進やアドバイザー派遣事業等を行ってきましたが、バブル崩壊によって、地価が下落、オフィス需要も一等地を除いて縮小したため、住宅を中心とした事業が進められています。ワンルームなど小さな賃貸マンションが多くなると、地区のコミュニティや治安上はあまり好ましくないように思いますし、実際にどういう使われ方になっていくのかも気になります。（山田 龍雄）

柳川でペロタクシーをこいでみた

原 啓介

ペロタクシーが福岡市でも走り出した。新聞やニュースなどで知られる方も多いと思うが、ペロタクシーは簡単に言えば「電動アシスト付き自転車に樹脂製のボディを被せた自転車タクシー」である。また、“ペロ”とはラテン語で“自転車”という意味だそうだ。1997年に「環境に優しい交通」というコンセプトのもと、ドイツで開発され、2002年に日本でも運行を開始。現在、国内13都市で運行している。

今年度、柳川市観光協会が内閣府の都市再生モデル調査の採択を受け、柳川市で新しい交通システムの実験を行っている。(協)地域づくり九州でそのお手伝いをさせてもらっているが、乗り物として、ペロタクシーが面白いのではないかといいことになり、柳川でも走らせてみようということになった。ペロタクシーは長崎市伊王島から一台お借りした。伊王島でペロタクシーを運行しているのは、“NPO法人長崎・伊王島の活性化を目指す会”であり、夏期に伊王島でペロタクシーを運行している。現在は冬季休業中で、運転の仕方を教えてくれる教官の方にも柳川に来て頂いた。

ペロタクシーは、まずその見た目にインパクトがある。ボディのフォルムが丸く、かわいらしい。ボディは広告やメッセージ等のペイントが施され、とても鮮やか。速度が遅く、人の目に付きやすいので広告塔としての役割が大きく、東京や大阪などの大都市では広告収入が運営費のほとんどを占めているそうだ。



三輪の自転車に樹脂製のボディ。
後部座席には男性の大人二人が乗れる。

緑色のペロタクシーは柳川の風景によく似合う

今回お借りしたペロタクシーは、車体が深緑色にペイントされており、柳川のお堀沿いの柳や川面との色の相性がとても良かった。どんこ船で川下りを楽しんでいる人の横を、ペロタクシーが通り過ぎていく様は、時間の流れをゆったりと感じることの出来るいい風景だと思った。ペロタクシーの運賃収入として全国で最も成功している例は広島宮島だと聞いたし、ペロタクシーは柳川のような観光地にも似合うのではないかと思う。

柳川では2月にさげもん祭り(柳川の雛祭り)が行われる。その期間中に合わせて、ペロタクシーを実験的に1週間走らせることになり、私もドライバーとして参加するため教習を受けた。もともと私は自転車に乗ることが好きで、毎日自転車通勤をしている。それで自転車には少し慣れているし、ペロタクシーには電動アシストが付いているからこくのは楽勝だろうと思っていた。しかし、ペロタクシーは車体の重量が150kgあり、大人が二人乗ることができるので、ドライバーと合わせると総重量300kg以上になる。実際に二人乗せて運転してみると、結構大変。11月だということに、坂道を登るときなどは額には汗をかいていた。1日中これを運転するのは結構きついかも...

ドライバーとの会話はペロタクシーの魅力の一つ。ペロタクシーは、時速10km程度のゆったりとしたスピードで走るので、ドライバーと乗客とのコミュニケーションがとても大事になる。福岡市や伊王島のドライバーに話を聞くと、やはり様々な人と出会えることが嬉しいし、会話を楽しんでいると言っていた。

公共交通は、利便性に加えて、乗る楽しさ、見る楽しさがあった方がいいと思うが、ペロタクシーはまさに見て楽しい乗り物で、風や匂い、街の



柳川のお堀沿いを走るペロタクシー。
どんこ舟に乗っている方々とあいさつを交わす。

賑わいを肌身でゆっくり感じることが出来る。電車や自動車では通り過ぎていただけの場所も、ドライバーとの会話を楽しみながらゆっくり通れば、様々な魅力が見えると思う。

広告収入を得にくい地方都市でどう運営していくかが今後の課題

ただ、一台約100万円と高価なため、広告収入の得られない地方都市においては多くの観光客に乗ってもらわないと事業としては成り立ちにくい。また、窓がないため雨の日は走れない。寒くなると客が乗ってくれないため、季節・天気によって左右されやすい商売であるという難しさもある。車道を走らなければならないので、車とのトラブルも気になる。また特に観光地においては、ベロタクシーは2人乗りなので、個人客には良いが、団体観光客には対応できないのではという意見もあった。

今後、国産車の開発によるコストダウンや、デザイン改良などによって課題が改善されていけば、都市部や観光地における公共交通のバリエーションとして、また環境にやさしいまちづくりへの取り組みとして、もっとベロタクシーを目にする機会が増えるかもしれない。

(はら けいすけ)

老舗料亭「老松」で考えた 「博多の芸妓文化」のこと

山田 龍雄

私が、昭和56年に「よかネット」の前身である「アルパック九州事務所」に就職した当時の事務所の場所は、現在の事務所と同じく中洲中島町であった。老舗料亭「老松」は、現在の事務所から約30～40mと近距離にある。当時から夜になると三味線の音が漏れ聞かれ、宴の楽しい雰囲気が伝わってくるものの、我々庶民には敷居が高く、また、行く時間的かつ金銭的余裕もなかったところであった。

今回、これまで敷居の高かった「老松」に行く気になったのは、ひとつは(社)福岡県中小企業経営者協会の中で組織されている「地域企業研究会(今年のテーマが博多・福岡で100年以上続いている老舗の企業・店舗と新規企業との両方の経営者の話を聞く)」の案内を受け、単に宴会だけではなく「老松」の女将さんの話が聞けること、

また、事務所も中洲中島町に戻ってきたことや隣には博多芸妓の取り次ぎや稽古の場である「博多券番」があることなど、今回の機会を逃してはなかなか行かないであろうと思ったからである。

ちなみに、博多大正世相史(井上精三著)によると大正5年頃に芸妓を呼べる料亭や飲食店は約200件程度あったと記されている。当時は、現在みたいに多様な遊興の場所がなかったとはいえ、非常に料亭繁栄時期であったと思われる。今では老舗料亭というと「老松」と中洲一丁目にある「満佐」ぐらいになったということらしい。

当日の参加者は13名。「老松」では、2階の掘り炬燵のある座敷で女将さんの卓話を20～30分ほど聞き、その後1時間30分程度の宴会となった。女将さんの話を断片的ではあるが、少し紹介する。

- ・「老松」という屋号は、先代の女将さんの芸妓時代の源氏名に由来している
- ・昭和2年に創業し、戦災にあって昭和22～23年に建替え、現在に至っている。従って、現在の建物は建てて概ね60年経っている。
- ・壁を塗り替えたばかりであった時期に、昨年の地震にあい、手直しがでた。
- ・夏場はお客さんも減るので、夏場の限定メニュー企画をし、これまでお世話になった企業にお知らせしている 等

お話の後、正調博多節など、芸妓さんの踊りが3曲ほどあり、宴会の中でいろいろと博多芸妓さんの状況を聞くことができた。

これを機会に博多芸妓や券番のことを少し調べてみようと思い、ホームページを覗くと、この歴史が面白いので、若手芸妓さんから聞いた内容と併せてご紹介したい。

- ・博多に芸妓が登場したのは江戸時代の中頃以降といわれている。大阪の芸妓が長崎の茶屋などに招かれて客を楽しませたが、長崎の滞在は百日以下と定められていたので、一時博多などで稼ぎ、再び長崎に戻った。その中から博多に定住する者が出て、それが博多芸妓のルーツとなったといわれている。
- ・明治、大正時代には博多の芸妓は2千人を抱え、料亭も東京の築地や日本橋と並び称された。
- ・昭和初期には金融恐慌のあおりを受けたが、昭和12年には884名の芸妓がいた。



板塀で囲まれた老舗料亭、老松

- ・明治34年には、博多に初めて券番が設立され、大正時代に相生券番、中洲券番、水茶屋券番、新券番、南券番の5つの券番があったが、その後戦時体制で券番は完全に消滅した。戦後、中洲券番と水茶屋券番が復活したが、昭和60年に全ての券番が一つにまとまり博多券番として現在に至っている。(平成12年9月27日付けの西日本新聞朝刊記事より)
- ・戦後は、時代の移り変わりとともに芸妓の数も減少し、現在は22名である。うち3名が若手で鬘をつけて舞う芸妓さんらしい。
- ・平成10年頃に、博多芸妓がこのまま高齢化していったら博多文化のひとつが失われるという危機感から博多商工会議所が音頭をとって「博多芸妓」を養成するため、一般に募集したところ33名の応募があり、7名が合格した。うち残ったのが今の3名ということらしい。
- ・芸妓さんの一日は、午前中は券番で決まってい



当社が入っているビルの隣にある「博多券番」

- る内容の稽古に励み、午後は自由に稽古をしたり、夜の支度にかかるといった具合らしい。
- ・当日、来ていただいたような若手芸妓さんは、3年間は稽古とお座敷に上がって芸事を身に付け、4年目で一本立ち(独立開業)できるらしい。

参加者の方々の何人かは「中洲のクラブなどもいいが、やはり年に1回程度は、優雅な芸妓さんの踊りや三味線の音に合わせた正調博多節を聞くなど、ゆったりと楽しむのもよいなあ」と言っていた。

博多の文化のひとつである「博多芸妓」や「老舗」の伝統が受け継がれていくためには、店側の営業開拓も必要ではあると思うが、私も数年に一度程度は博多の芸妓さんの小唄と踊りを楽しんで少しは貢献できればと思った次第である。

(やまだ たつお)

近 況

佐賀、第2の知的生産時代『近代を開いた江戸のモノづくり』というシンポジウムで、インターネット博物館の話をしてきた

12月10日に、上記のシンポジウムが、「大艦・巨砲を造る“江戸時代の科学技術”」という県立博物館の企画展と相まって開かれた。私にもパネラーとして話をせよということだったので、「江戸のモノ」と「大艦・巨砲」に引っかけて少ししゃべって来た。その趣旨は、「モノづくりとか大艦巨砲」というと、少し誤解されやすいのではないかという危惧である。

江戸時代のモノづくりや、佐賀藩などの大艦巨砲は、モノづくりと言っても“知的生産”そのものである。まして企画展示の超目玉になっていた、からくり儀右衛門(田中久重)の「万年自鳴鐘(万年時計)複製品」、「弓曳童子」などは、モノをつくったということでは、決してない。私の持論の「情報産業とモクモク産業」の表を掲げておくが、社会がモクモク産業の時代に、知的生産の先端を走っていたと言うことを述べたかったのである。

そして今後は、生産の情報化(知的生産化)の高まりに対応して、知的生産の消費者が大衆化、大量化する中で、地域社会にとってどのような知的生産・消費の仕組みが考えられるかということを考えてきた。それに対する回答として、提案し

情報産業とモクモク産業

	モクモク率 (仮説)	物的空間	情的空間	生活空間 (狭義)
採集社会 (家族、部族)	90~99%	とにかくモクモクと狩猟をした。生産に占める知恵の学習率は1~9%。幼児のうちから労働力として活躍。	家族、部族間の知恵の受け継ぎによって労働力の育成がうながされてきた。	部族 大家族
農耕社会 (部族、集落)	70~90%	道具・種苗、生産技術などの比重増大、情報化の進展、知恵の伝達意義の増大。10~15歳で一人前の労働力。	集落によって知恵が受け継がれたが、水系、放牧圏など生活圏が拡がり、知恵の受け継ぎ専門のシステムとして、寺子屋教会、小規模な小学校がつけられた。	大家族
工業社会 (地域社会、流域交通圏)	30~70%	機械化、動力化社会。エネルギー革命によって動力としての人間の後退、モクモク率の低下。15~18歳で労働力として自立。	生産力に知恵の部分が増大。大規模、専門的学習システムが必要となった。(高校、専門学校、大学など)	核家族
情報社会 (グローバル 地球的)	10~30%	製品に占める知恵の部分の大幅増大。工場内でも知的労働となる。農業でも高度な機械操作及び知的労働化。モクモク労働の機械による代替、企業内での知恵の受け継ぐ時間の増大。モクモク労働はレジャーとなる。	生産及び生活における知的ネットワーク化、生産力の大半を知恵が受け持つ。学習の専門化、長期化。成人に達するまでの学習コストの増大。生産以外の面での知恵の受け継ぎの必要性の増大。つまり情的空間における非生産要素の増大。	個族

出典：九州北部学術研究ゾーン整備基本計画(1991.7) ©糸乗貞喜

ているのが"地域まるごとインターネット博物館"である。

話の中で、「5年後、10年後にでも、地域の情報機関としての新聞がなくなったときに……」といった途端にガラガラと笑われて、一寸ひるんだ。私の高校生時代には、下宿する場合は新聞を取ったりしていた。しかし現代では、すでに若い世代は新聞から離れてしまっている。購読層の世代別調査はあるのだろうか。10年後の新聞購読層予測とか、購読数予測などといったものはあるのだろうか。新聞の折り込みチラシは、かなり重要な地域情報だと思うが、新聞がなくなったときはどうするのだろうか。

私が考えている"地域まるごとインターネット通信"は博物館にもなるし、チラシ発行機関にもなる。なるというよりは、地域情報機関が必要ではないかということが言いたいのである。十分、分かっていたかどうか分からないが、「是非、地域まるごとインターネット博物館を考へてほしい。現在私は、その手伝いをする『NPO地域まるごとインターネット博物館』の設立準備中です」という宣伝をしてきた。

翌11日に、企画展を見てきた。佐賀藩が行ってきた鉄鋼、造船はもちろん、からくり儀右衛門の仕事もすごい。江戸時代の和時計は、昼間の時刻の刻み方が"明け六ツ"から"暮れ六ツ"までとなっていた。夜はその逆である。従って、福岡では冬至の昼間は10時間ぐらいで、夏至では14時間ぐら

いになる。北海道では、この差はもっと開く。

「一刻」といっても、夏の昼時間は、冬の1.5倍ぐらいになる。それが表現できる仕組みが割駒式の時計ということである。気になったので儀右衛門の時計は「何処に合わせてあるのですか」と聞いてみた。「京都でつくったので、京都です」という返事だった。

造船とか、高炉の展示も面白かった。是非見に行くことをおすすめする。(糸乗 貞喜)

【次のインターネット博物館
・リアルタイム実験のお知らせ】

日時 2006年2月25日(土) 14:00~17:00
場所 柳川雛祭り、さげもんめぐり一帯
実施内容

- ・筑後川まるごとインターネット博物館
- ・柳川市観光協会(協会が実施中のペロタクシー実験も発信する)
- ・水色の自転車の会(教養自転車の社会実験グループ)デポジット自転車の活用実験を、柳川雛祭りにあわせて行う。

大相撲九州場所のことで叱られた話

「九州場所は、どないなっとなね」と、場所中の四日、五日目に関西へ行ったとき、一発かまされた。「行くがな、行くがな」と返事をせざるを得なかった。こちとらとしても、テレビに映るガラアキの座席が気にはなっていた。とは言え、まさか九州場所の責任者のように追求されるとは思ってもみなかった。これも、今、糸乗が九州へい



一寸寂しい場内

るのだと思ってくれる人がいるということで、ありがたい話ではある。

というわけで、事務所で参加者を募って、一升(ヒツス)A席=45,200円・4人分をうめるべく出かけた。運良くというか、状況が悪くてなのか、一升のお金で「二升到座してください」といわれて陣取ったのは、向こう正面のA升で、ゆとりのある座席だった。缶ビールのロングと、焼酎、水、それにデパートの千円の弁当はなかなか合理的で、十分満足が出来た。決して高いあそびではない。

ついでに、糸乗の「あそびの料金論」にふれると、「歌舞伎を見に行くのは高い」という意見に対して、「歌い手さんが1人出てくるショーでも二万、三万円するのに、役者・謡曲・三味線だけでも百人くらい出てくるし、裏方を入れると大変な人数になるから、比較すれば安い」といっている。相撲を見ながら、「このショーの関係者総数は大変な数だな」と思った。

この場所は、朝青龍の七連覇、琴欧州の大関昇進など、終わりは大変な盛り上がりだった。その証拠にその前の東京場所では、三賞は二つだったのに、九州では4人に五つの三賞がでた(これは一寸強引かな)。決して高いショーではない。

九州の皆さん。来年の九州場所では、連日の“満員御礼”で見返してやりましょう。また日本中の皆さん、大相撲を見に来て、そのあとで五島列島のアキサバの刺身で、芋焼酎などいいものですよ。ぜひお越しください。(糸乗 貞喜)

いざという時のために

昨年は生まれてから一番大きな自然災害を体験した年だった。地震を含めていざという時どうすればいいのか正直分からなかったのが、福岡市百道浜にある福岡市民防災センターに行ってみた。

まず驚いたのは駐車場が満車だった事、中に入ると家族連れや意外にも大学生がたくさん来ていた事だ。地震から8ヶ月経ち、最近は余震もほとんどなくなったのに、みんなの関心が高い事に驚いた。

40人ぐらいのグループごとにいろいろ体験して回るのだが、私たちはまず消火訓練からスタートした。消火器はもちろん知っているし、学校で消防士の方が実際消火しているのも見たことがある。でも自分でしたことはなかった。4人1組になり、火災の映像を見ながら消火する。火事を見つけたらまず大声で「火事だー」と叫び周りに知らせるのが大事なのだそうだ。

私の組は、トロかったのか水をかける位置が悪かったのか消火できず燃え広がってしまった。消火器で対応できるのは小さい炎ぐらいで、天井につくぐらい燃え広がった時は逃走しないといけないそうだ。

次に強風・地震体験。強風では風速30mを体験する。飛ばされはしなかったが、前に歩くことはできなかった。というより息ができないので歩く気にならない。地震ではまず震度5(横揺れ)を体験する。揺れを感じたら机の下などに避難し、その体勢のまま震度7を体験する。震度7は固定してあるはずの棚が倒れてくるかと思った。避難中は下を向いてないで周りの状況を見ておくように言われた。ガラスが割れたりするので、その後逃げる際に気をつける為だそうだ。また、阪神と新潟の震災の際、生き埋めになって助かった人の3/4は近所の人達に救助されたそうなので、近所の人と仲良くなっておいた方がいいとも言われた。

その後ガイダンスを聞き、最後に火災体験。煙が充満した迷路になった小さな部屋を、非常口の案内灯などを目印に通って避難する。煙に気を取られていたら突然真っ暗な部屋に入ったので(火災時は停電になる可能性が高いので、中は真っ暗だった)前の知らない人をワシ掴みしてしまった。「建物に入ったら非常口の案内板を確認すること、煙は上へ上へいくのでかがんで歩くこと」と入る前に言われていたが、「真っ暗」と「煙」と「迷路」は、パニックになると思った。いかに冷静になれるかが大事だと思った。

最近防災グッズが売ってあるのをよく見るが、

あれは震災後に必要なものなので、避難中にどう動くかはやはり確認（訓練）しておいたほうがいいと思う。（佐伯 明日香）

鹿児島での地域づくりに参加

昨年できたネットワークに「カゴシマライフネット」という任意団体がある。この団体の代表の西田氏は大学の先輩にあたる。鹿児島の地域づくりにも係わりたと思っていたときに鹿児島大学の友清教授に紹介して頂いたことがつきあいのきっかけだ。昨年暮れより、NPO法人として組織をつくって活動していこうということになり、私もメンバーに入り、手伝いをする事となった。

カゴシマライフネットの活動としては、UJイターン希望者がスムーズに鹿児島へ移住し定住を図れるよう、住まいのマッチングをしたり、職のコーディネート（熟練労働者と地元事業者等）などを行っていく予定である。また、そのための受け皿づくり、地域の魅力発掘のための研究会などを立ちあげる予定になっている。単なるセミナーや研究会だけではなく、UJイターン希望者向けの移住体験ツアーみたいなことも企画してはどうかといった話もある。今後検討することが多いのだが、まずは小さいことでもよいので、アクションを起こしていきたいと思っている。

（雪丸 久徳）

糸島サロンははじめました

糸島での田園暮らしを求めて、前原市に引っ越しして早10ヶ月。地元の地域づくりに関わりながら、少しずつ地域に溶け込み、都市人と農村人のつながり系になればという活動をちょっとずつ進めています。

サロンを始めるきっかけは、九大の坂口先生と前原駅近くのイタリアレストランで飲んでいた時のこと。なぜかイギリスのパブの話になり、そこが地域の情報センターになっているというところから、糸島でもそういう場をつくらうと、私と先生、レストランの店長の3人で盛り上がったわけです。

第1回は糸島に移り住んだ坂口先生に話題提供をしてもらい、3人の知り合いを集めて10人ぐらいの交流会をしようというところまで、その場で一気に決めてしまいました。

11月12日（土）の初会合では、小学校の先生から白糸酒造の蔵元さん、ハーブレ스토랑の店長

さんなど15人近くの参加がありました。中にはいろんな人が集うサロンという場に慣れていなくて、「知らない人ばかりで居づらい」という人もいましたが、小学校の先生と総合学習の中で、「地域づくり」というテーマで何かできないかという話で盛り上がったり、農村集落をどうやって維持していくかを次回のサロンテーマにしてはどうか、といった話が出るなどいくつかの輪ができ話もはずんでいたもので、初回としてはまずまずだったのではないかと考えています。

交流会が立食になるなどのこちらの段取りの悪さもありましたが、知的交流の場として、ぼちぼち続けていければと思います。（本田 正明）

大学時代の恩師の7回忌に想う

本業は彫刻家、しかも鹿児島大学建築学科の造形学の非常勤講師をされていた先生、小生からすれば、どちらかというところ「天文館大学」の恩師であった柳田菫先生の7回忌が今年の11月26日に京都東本願寺大谷本廟にて執り行われた。

『僕が死んだときには葬式の残った金で祇園で芸妓をあげて祝ってくれ』という粋な遺言を残してくれた先生でもあった。7年前の納骨の儀のときには、その遺言を果たすために教え子30数名が京都に集まり、祇園で舞子、芸妓さんをあげて楽しませていただいた。（このことはよかネット「40号」掲載）

今回の7回忌には鹿児島から3名（うち2名は恩師ではなく天文館某スナックのママ、ザビエル公園のサビエル像のモデルとなった元機械学科の末永先生）、福岡からは私を入れて3名、京都から2名の総勢8名が参加。納骨の儀のときと比べると少し寂しい7回忌ではあった。

大谷本廟には13:30に集合。定刻の供養時間になると、「 県 市の さん」といった調子で、全国から供養に来られている方々の呼び出しがある。本堂には100名以上の方が一斉にあがると、すぐに10数列の線香台が用意され、一斉に線香をあげ、まとめて坊さんのお経が約20分程度唱えられた。供養する人数が多いのでやむを得ないこととは思いますが、まさに大量生産流れ方式での供養であった。お寺の雰囲気は荘厳ではあるが、いささかありがたみが薄まるのはしかたがないのであろうか。

儀式が終了したあと、時間に余裕のある5人程

度が近くの喫茶店で先生を忍んで思い出話をさせていただいたのはなによりであった。この時に「教え子も年を取り、記憶もおぼつかなくなることは目に見えている。先生のことを知る人がいなくなってしまう前に、先生のエピソード集をまとめようではないか」と盛り上がった。13回忌には、是非、このエピソード集を取りまとめて、また出席したいものと想った次第である。

(山田 龍雄)

電車と自転車でぶらりと観光したい

最近、自転車を買った。今まではマウンテンバイクに乗っていたが、今回買ったのは小径車と呼ばれる、車輪の小さな折りたたみ自転車で、簡単に分解できるようになっている。

学生時代は自転車の自走で山に登って降りてくるという遊び方をしていたのだが、これからは自転車と電車を組み合わせた旅をしようと思っている。自転車を分解して袋に詰め込んで「荷物」の状態にして電車に持ち込み、旅先で組み立てて買い物や観光を楽しもうという魂胆である。

電車と自転車を組み合わせた旅のモデルコースを解説している雑誌なども出ており、読んでいると色々な遊び方ができそうだと想像がふくらむ。

しかし、やはり分解するのは少し面倒で手間がかかる。自転車を「荷物」ではなく「自転車」のまま持ち込むことが可能な車両が増えれば、もっと手軽になり、観光の楽しみ方が広がると思う。また、観光スポットを自転車で見てまわるモデルコース等があれば、「自転車でゆっくり見てまわる健康志向の旅」ができていいと思う。そういう楽しみが増えれば、電車の利用者も増えるかもしれない。まだ買ったばかりなので旅には行けていないが、正月休み期間中にでもどこか行ってこようかな、と思っている。(原 啓介)

1年の計は元旦にあり

「痛いところをつかれてしまった。」11月23日の西日本新聞の朝刊を目にした朝の第一声である。本誌でもパーティや本紹介で紹介させていただいた連載「食卓の向こう側、第7部生ゴミは問う」の開始である。記事の中の『料理をする時は、レシピ通りの食材を新たに買い込んでしまい、使いきれずに賞味期限がすぎた食材を捨ててしまう』光景はごみ出し日の私と重なる場所があった。

これまでの連載で、食の大切さを思い知った私

は、毎日とはいかないが、自炊を心がけるようになった。すると、ゆずの皮がこんなにも香ること、所員の本田からお裾分けしてもらった就農準備校で育てたのとれたての野菜の味は違うことなど嬉しい発見があったのだが、食材の無駄遣いに罪悪感を感じ、次第に自炊する回数が減っていた。

12月初旬、山口県阿武町林業振興組合の方とのイベントで、旬のほうれん草の緑は黒に近く根本は赤々としていること、山でとれるなめこやシメジが大きいこと、そして遠くに住む孫達へ「旬と本物の味を知って欲しいと月2回野菜を送っていて、家族以外にもいろんな機会を通して伝えていきたいと思う」というお話を聞く機会があった。

1年の計は元旦にあり。今年目標の1つは、食材を十分工夫して旬を美味しく食べることである。(愛甲 美帆)

--- 編集後記 ---

小生も若貴全盛のころ以来、九州場所に行ってきました。まさに若貴時代とは雲泥の差、三役の取り組みになっても一向に客足は伸びず。高見盛以外、あと2~3人の人気力士が出てくるか、朝青龍の真のライバルが出てくるなど、相撲人気復活することを願いたいものです。しかし、弁当を肴にビールと焼酎を飲みながら、相撲見物も風流でいいものです。皆さん、たまには九州場所に出かけましょう。(だ)

11月号の遅れの反省と年末というスケジュールの短さにより「締め切り厳守」を声高に叫んだところ、いつもより早く原稿が揃いました。次号も引き締めていきたいと思えます。(あ)

よかネット No.79 2006.1

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号

福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail: info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-2531

名古屋事務所

TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋